

Kenji Yoshida

J'ai, quelque jour, dans l'Océan,
(Mais je ne sais plus sous quels cieux),
Jeté, comme offrande au néant,
Tout un peu de vin précieux...

Qui voulut goûter la liqueur?
J'obéis, hélas, à son vain
Peut-être, hélas, mon cœur,
Songeant au sang versant le vin?



吉田健一集成

Sa transparence accoutumée

Après une rose fumée

Reprit aussi pure la mer....

瓦礫の中

Perdu ce vin 絵空ごとと les ondes!...

J'ai vu bondir 金沢 dans l'air amer

Les figures 東京の昔 profondes....

生の輝きに溢れる豊潤無垢な長篇小説四作を収録

新潮社

吉田健一集成

7

長篇小説

新潮社

Kenichi Yoshida

吉田健一集成

7

[第3回配本]



発行…………一九九三年九月五日

著者…………吉田健一「よしだ・けんいち」

発行者…………佐藤亮一

発行所…………株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話 営業部〇三 三二六六 五一 一

編集部〇三 三二六六 五四 一一

振替 東京四一八〇八

印刷所…………凸版印刷株式会社

製本所…………加藤製本株式会社

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが、小社読者係宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。

吉田健一集成・7 ■ 目次

瓦礫の中

5

絵空ごと

99

金沢

209

東京の昔

301

解題

408

吉田健一集成
7

編集協力
清水徹

瓦礫の中

1

かういふ題を選んだのは曾て日本に占領時代といふものがあつてその頃の話を書く積りで、その頃は殊に太平洋沿岸で人間が普通に住んでゐる所を見廻すと先づ眼に触れるものが瓦礫だつたからである。そしてさういふ時代のことを書くことにしたのは今では日本にそんな時代があつたことを知つてゐるものが少くて自然何かと説明が必要になり、それをやればやる程話が長くなつて経済的その他の理由からその方がこつちにとつて好都合だからである。他意ない。

それで早速その説明を始めると日本に占領時代といふものがあつたのは日本がアメリカその他の国々と戦争をして負けて主にアメリカの軍隊が暫く日本を占領して軍政を布いてゐたからで、何故さういふ戦争があつたかといふことまで言ふと幾らなんでも話が長くなり過ぎるが、免に角さういふことになつて敵の軍隊が上陸して来て占領、軍政になつたことは事実でアメリカ式の軍政であるからG1、G2などといふものが設けられ、その他にもVTR、PQMなどといふものがあつて、かういふのは今となつては文献を詳しく調べて見なければそれが何の為のどういふ機関だつたのか大体のことさへも解らない。併しそ

の一部はこの話のもつと後にどうせ出て来ることになる。SPQRといふのもあつたかどうか、要するにこの方面で話を進めるのに絶えず念頭に置かなければならないのはこの時代に日本国中に今日の日本でも時々見られるアメリカの、或はアメリカ風の軍服を着た人間で確か左の肩の所にそのPQM、XYZなどの印を刺繍したものを付けたのが溢れてゐたことである。

併し瓦礫の方のことをまだ言つてゐなかつた。日本を相手に戦つたのは主にアメリカで、そろそろ止めを刺してやらうといふ向う側の作戦になつた時に日本の爆撃に乗り出したのは全くアメリカの空軍だつた。と書くとうとうしてもその所謂、空襲の初期からのことを色々と思ひ出さずにはゐられない。この戦争でアメリカ側の最新式の爆撃機はB29といふ型のものでこれは現在のB52などよりも遙かに美しい形をし、これが編隊を組んで東京に秋来たりすると昼間ならば澄み切つた青空にその銀色の蜻蛉とも飛魚とも付かないものが何十台と日光を射返すよりも銀色の艶の靄に包まれたやうになつて進み、夜は地上からの探照灯を受けてその色が一層冴えた。これに向つて我が方では零戦その他が迎撃に上昇して行き、敵側に撃墜されるばかりでなくてどうかするとそのB29が黒煙を吐いて落ちて行くのを見るのはいい気味だつたが、それが落ちた所が海でなければそこそぞ災難だつた。その敵機が積んでゐる油で一町四方だかが焼けたさうである。

それで敵は落ちても任務を果たしたことになつて、どうも例へば東京のやうな町、或は一般に日本の都市の場合はアメリカ側

の目的は爆撃することよりも焼くのが目的だったらしい。その為、に用ゐたB 29に劣らずその頃の東京は今日よりも遙かに美しく、都市の名に背かない町で、ラフカヂオ・ハーンは明治初年の東京に就て少し高い所に登つて見渡せば東京は都市よりも森を思はせると書いてゐるが、戦争末期に近づいた東京もまだ多分にその倂を残してゐて緑の拡りの中に掘割が縦横に切られ、それが青空の下では紺碧に見えて敵機の乗組員も結構眼を楽まされたに違ひない。その木蔭に、或は木に囲まれて立つてゐるのが主に木造か木骨の煉瓦の建築でその木も建築も敵のものとなれば焼くのに適し、そのやうにアメリカの軍事専門家も考へたらしい。兔に角、焼夷弾といふものが発達したのはこの戦争の時、立ち木も燃えてしまふのだからその威力は自分の眼で見なければ信じられるものではない。

さうした空襲で起された火事もそれが余り自分がある所に近過ぎなければ壯観だった。我々が炉に火が燃えるのを眺めてゐても冬ならばいい氣持がするもので、火事は江戸の花と曾て言はれ、今日でも遠くの火事は綺麗なものである。併しそれが空襲でB 29の編隊が落した焼夷弾によるものになれば既に火事などといふものではなくて殊に夜ならば空が地平線に沿つて薄紅に染まり、これを背景に凄じい火勢の炎が朱とも真紅とも見える色をして一面に視野を遮つてこつちがその熱を感じない距離ならばただ息を呑んだ。その当時も東京は世界で有数の都市だったのだからその大半が次々と空襲を受けて燃えて行く所をここで想像しなければならぬ。と言つても、そんなことが出来

るものではなくて、その焼け跡に立つた所でそこがさうなるまでにどのやうな火と火の粉の乱舞があつたかは既に記憶から消え掛けてゐた。それは悪夢を忘れるといふやうなことではなくて人間は余りに華麗なことをいつまでも覚えてゐるものではないのである。尤もこれは一つには饗宴が終つて残つた焼け跡がひどくみすばらしいものでその原因が仮に記憶に残つてゐてもそれこそ夢としか思へないといふこともあつた。

それで瓦礫である。そのうちで瓦は言ふまでもないが、例へば煉瓦の建築でも中が焼けて外があればの熱にさらされることになれば崩れ落ち、その他に逃げる時に持つて行かなかつた自転車でも鉄瓶でも便所の朝顔でも摺り鉢でも何でも焼けてなくなかなかつたものが適当に外形を損じて散らばり、積み重なつて土を隠し、それを誰かが両側に片付けて小道が出来たり、罅だらけになつたアスファルトの道がまだその間を通つてゐたりした。そして耐震耐火と称する鉄筋コンクリートの建築が所どころにそれでも残骸と言ふ以外にない恰好になつて立ち、そこまでも何も邪魔するものがないので近くに見えるのが実は恐しく遠かつた。序でに避難先の番地をボール紙か何かに書いてそこにもと住んでゐたものが木に打ち付けて地面、或は瓦礫の山に突き刺して行つてゐるのを足してもいい。併しそんなものは薪にするのに手頃なので直ぐに誰かに持つて歸られた。

行く先があるものは焼け跡を離れても、なければそこにもと通りある他なくて、それに焼け跡から又どこかの焼け跡に移つて来たものもあり、その瓦礫の中に人が住んでゐない訳ではな

かつた。この戦争中に防空壕といふものを作ることが奨励され、少しでも空き地があれば強制されて、それが多くは手間や費用の関係もあつて地面を或る程度の深さまで細長く掘つて上に何か被せたものに過ぎず、これを防空壕と言つても空襲になつて人助けにどれだけなつたかこれも統計を取りでもしなければ解らないが、そんなことが凡て一応は終つて占領時代に入るとこれは家の代りに住めないものでもなかつた。殊にさういふ防空壕を作つたものの中には家を焼け出されてから暫くは、可哀さうにその頃は何日か位に思つてそこに住む積りでゐて大きく掘れるだけ掘つたものもあり、更にその中には防空壕に茶簞笥やお櫃を持ち込んだのが幸に焼けずにすんだ場合もあつた。逆に人間まで焼けるのも珍しくなつたのである。それで戦争が終つて見ればそこで暮すのは少くとも都落ちするのを免れることで、さういふことが凡て昔のことになつた現在、もし水はと問ふものがあるならば、その頃は焼け跡に水道栓だけが焼け残つてゐるのがあつて栓を廻せば水が流れ出し、明りは多少の危険を冒して同じく焼け残りの、或はその後に修復した電線から電氣を取れば戦災といふ言葉がどこでも聞かれた時代に文句を言ふ役所もなかつた。

ここで人間を出さなければならなくなる。どういふ人間が出て来るかは話次第であるが、先に名前を幾つか考へて置くことにしてこれを寅三、まり子、伝右衛門、六郎に杉江といふことで行く。まだその名前の人間が出て来る、であるよりも寧ろ出てゐる訳ではなくてただ名前の方が何となく頭に浮んだに過

ぎない。これから誰か出て来る毎にこれにその名前のどれかを付けて、名前が多過ぎるか足りなくなるかすればもつと名前を考へるか、或は話の筋を変へるまでである。バルザックはパリの町を歩いてゐて Z. Marcas と書いた看板を見付け、これだ、これだといふ訳でやつと何とかいふ小説の人物が揃つたさうで、さういふ手間を掛けるよりも名前の方を先に考へて置くのに越したことはない。それもなるべくどこにでもありさうな名前がいいので、例へば万里小路などといふ名前だとお公卿さんにする義理が生じることになり、I・W・ハーバーでは外国人にしか付けられない。

或る朝、寅三は防空壕の屋根を潜つて外に出て廻りの焼け野原の風景を見渡した。寅三といふ名前でも思ひ出したのか、又新たな考へが頭に浮んだのか、これは樺田（くぬきだ）といふ苗字で戦争が終るまではびくびくしながら敵性とか呼ばれた英語を教へる中学校の先生だつた。併しそのやうなことは現にその住居である防空壕から這ひ出て朝日が焼け野原を満してゐるのを眺めてゐる寅三と直接には大して関係がない。所謂、小説ではどういふことになるのか知らないが、かういふ場合に人間の頭を掠めるのは国破山河在でもなければ家が一軒欲しいでもない。寅三が住む防空壕は当時はまだ東京の牛込区でその頃はまだ外濠が見降せた高台にあつて、廻りは焼け野原でも外濠の向う側の土手には松の並木が緑色に光り、その大体の所は反対の方角の地平線に箱根連山の上に富士が浮び上つてゐた。今日では考へられないことであるが事実はさうなのだから仕方がない。

さういふいい朝だったのである。春と初夏の間と言った季節

で朝の風はただ涼しく感じられ、そこは高台なので夜露の湿気も残つてゐなくて朝がどこまで抜るかといふ具合の気分だった。それは渋谷の、又新橋の闇市まで、市ヶ谷のアメリカさんの屯所、宮城とお濠を距てた第一相互のアメリカさんの総司令部、更に見た所は同じ焼け野原と少しばかり所どころ焼け残つた区域を越えて現に向うに眺められる富士山まで抜つてゐるやうなのではなくて実際にそこまで行つてゐる訳だった。この辺は焼け野原でも、或は焼け野原であるから雑草が盛に生えてゐてただの野原の感じがし、戦争中は空き地ならばせつせと掘りくり返して野菜などを作るのが国策とかいふものだったのが寅三がある近所では戦争が終るとともにもう国策でもないだらうといふ考へから早速止めてしまつて、さういふ野菜畑の凡そ都会らしくないみじめな営みの代りになほ更雑草の緑一色になつてゐた。

寅三は自分が生れて今まで住んで来た土地が全く違つた新しい場所に変つたやうな感じがした。その前からあつて自分が始めて来たのだといふのでもなくて、更に自分がいつもゐる所がもと通りでどこか他所に、例へば外国に行くのならばその比較で新しさとその反対といふ意味での古さの釣り合ひが取れるものであるが、これはそこに就て自分が知つてゐた一切を吹き消して別なものになつたのであり、それをもとの場所と言へるかどうかとも多分に疑問の余地があつた。そしてこれは牢屋にぶち込まれたなどといふのでもなくて気持がよくて静かなのは昔の

東京と変らず、そこで思ひ出が少しばかり甦つて東部軍管区情報などといふものに頭を使ふ必要もなくなり、使ひたくてももうそんなものは聞けなかつた。その晴れた朝その頃既に言はれ始めてゐたやうに戦争中の記憶は暗かつただらうか。それよりもそんなものは綺麗さっぱりどこかへ行つてしまつてゐて、偶に思ひ出すのはもう用がないことだけに一層せいせいした。

併しそれで我々はこれから何をなすべきかといふ風なことを寅三が考へずにすんだのはやはり年の功と言はなければならぬ。我々は何をなすべきかであるよりも我々が余り生きてゐるやうな感じがしないから何をなすべきかと開き直り、虚勢を張つてそれで若いうちは何かと苦勞をして色々と、いいことがあるのだらうが、そんなことが重なるうちには自分が朝起きて外の景色を眺めてゐるのだといふ種類の感じの方が強くなつて何をなすべきかでもなくなる。併し頂上の雪も大概溶け去つた富士を見てゐるうちに自分が生れてから何度も眺めて来て、戦争が終る頃までは家の屋根の上に現れ、この頃は文字通りに地平線の向うに出る富士がさうして屋根越しにはなくなるまでに言はれて説かれて書かれて来たのは何なのかといふ考へが寅三の頭を掠めた。さういふ仕儀になつたのはその言はれて説かれてが東部軍管区情報と違つて戦争とともに消えた現象ではなくて寧ろ戦争がすんでから洪水に風の勢が加つたやうに一層盛になつて行くのが感じられたからだつた。尤もこれは新聞やその頃からばつぽつ出始めてゐた各種の雑誌を読み、ラヂオでその種類の番組を聞けばの話で、それをやらなければ東京はその朝

でも解る通り静かだったが、さういふことを余りやらない寅三までがそんな感じになることがあつたのだからその勢は如何ばかりといふ一つの時代色をここに点じたのである。

寅三がいままでさうしたことを考へてゐた訳ではなかつた。それはその朝の気分から察せられる通りお腹が空いて来たからで、もう一度屋根を潜つて防空壕の中に入ると妻のまり子が（だから名前は先に考へた方がいいのである）手製のパンを電気ので改めて焼いてトーストにしてゐた。この電気の炉といふのは今日では先づ見られない代もので、確か電気焔炉といふ名称で通つてゐたと思ふが、大したことはなくて蚊取り線香の形の溝が出来てゐる瀬戸物の平たい板に螺旋状の電線を通し、この板を金属製の台に嵌めたもので闇市に行けば売つてゐた。その闇市のことも何れこの話に出て来る。同じくその闇市に行けばパンの原料になるうどん粉もパン種も出来上つたパンに付けるバターも紅茶も売つてゐて、それで樫田一家も（樫田がこの夫婦の苗字であることは既に書いた）当時はまだ西洋風と考へられてゐた朝の食事に入り用なものにこと欠かなかつた。

このまり子といふ女に就ても一言して置きたい。これが兎に角小説の部類に属する話である以上まり子をどういふ女に仕立てようとかつちの勝手で、まり子は非常な美人だつた。尤も美人といふのも人の考へ方次第であつて、もともと美人だとか美男だとかいふのは多分に美しいなどといふことと直接には何の關係もない要素が入つて来て出来上る觀念であるから少くとも一般論としてはその美しいのと關係がないことの如何によつて

例へば一人の女が美人であるかないかが決る。ヨーロッパの或る国の或る時代には金髪で眼が鼠色で背が高いのが美人だつたやうなものである。それでまり子のことに戻つて、これは蔭になつてゐる所に置けばその蔭が何か言ひ始めるといふ風な感じがする女だつた。それが一般論、或は今日の一般論に従つて美人であるかどうか、兎に角まり子はさういふ抽象的なことよりも自分が鏡に向へば美しく見える位のことは知つてゐた。やうだつたから自分を人工的に美しくする、或は人にさう思はせる為に苦勞する必要もなく既に自分が持つてゐるものに対して恬淡であるのが世の常であるからまり子の関心も主に他のことにあつた。

主にといふのは男女の別を問はず、誰でも鏡を見て自分の顔が蟾蜍のやうになつてゐたらそのことに関心を持たざるを得ない。併しまり子の場合にはさういふこともなかつたから一層他のことに興味を覚えることになつて、その一つに食へることがあつた。まり子が渋谷に店を開いてゐた料理屋の生れだつたからかも知れないが、それともうか解らなくて自分の家の職業に反撥するのが珍しくないのはこれも男女の別を問はない苦である。併しまり子は食欲旺盛で舌も肥えてゐたから恵まれた環境に育つたと言ふべきで、やがて研究心を抑へ難くて日本料理の自分の家から洋食の料理学校に通ふやうになり、そこで料理が下手な女を妻にするといふ一生の不作に備へてやはり料理を習ひに来てゐた寅三に出会つた。寅三も食ひしん棒だつたのである。従つて習ふ程に料理も旨くなつたが、まり子と結婚してからは

この本当は男の領分で家庭では女の守備範囲である料理人の座をまり子に譲り、それで今もうどん粉を焼いて膨ませて作ったパンをもう一度焼いてトーストにしてゐるのはまり子だった。

外は初夏に近い晴れた朝でも防空壕の中が薄暗いのはその構造から言つて仕方ないことだった。もともとこれは風通しをよくして明り取りにも気を配るといふやうなことが主になつて作られたものではなくて、そこら中に爆弾や焼夷弾が落ちて来た時に少しでも地面から下の所にゐた方が少くとも爆風位は除けられるだらうといふ程度の考へで所謂、軍部なるものなどが奨励した一種の弥縫策だったのだから窓を付けたりすることが度外視されたのは当然だったのである。ただ寅三が暇を見てここを掘つてゐる間にそのこと自体が面白くなつて幅を広くし、その長さで屋根を支へるのに柱を何本か立てて深さも兎に角人間が中で背が伸ばせる所まで掘り、土の側面に杭を打ち込んで板を張つたり腰掛けを取り付けたりしたので住むのにさう不愉快なことはなくて今は床にも板を並べて畳が敷いてあつた。その畳の上にちやぶ台を持つて来てこれから寅三とまり子の朝の食事が始る所である。

まり子は食べながら昔はどここのパンが旨かつたなどとは考へなかつた。これは自分が作つたパンの手前ではなくて他にパンがなければ仕方がないからであり、闇市ではアメリカ軍用の白いパンも買へたが、これは甘くて食べられたものではなかつた。つまり、ないといふことで、さうなるとまり子の関心は自分が作るパンの出来栄えに向けられ、確かにそれがさう悪く

はないことは寅三が食べる量でも解つた。少し講釈をすれば、婦は己を愛するものの為に梳るかどうか知らないが、ステイヴンソンによれば（或はその未完成の遺稿を書き上げたクイラ・クーチカ）女は男に食べさせることに情熱を覚えるものだからで確かに我々が飼ひ犬に食欲がなくても心配するならば寅三が食べる具合を見てまり子が喜んで別にも不思議に思ふことはない。当時は日本の国民の大部分が飢ゑに瀕してゐてといふのが文献に残つてゐる事実ではなくて一般に今日信じられてゐる説であつてもそれは闇をやらないもののお話で、その闇をやるのに金が必要であつても金は今日にも増してどこからか入つて来て消えてなくなるあぶく銭の性格を備へてゐた。まり子は寅三の爲にもう一度焼いてゐるパンにバタを付けてやる程の好きではなかつたが、そのパンが焼けるのを寅三が取る手遅しと待ち構へてゐてバタを塗りたくるのを見てまり子は、ここで満足だったと書くべきだらうか。

フロレンス・ナイチンゲールではあるまいし、そんな女はつまらない。そして男にも負担になる。逆にまり子が不満だった訳でもないが、これは外が天気であるのと同じで凡てがそのあるべき状態にあるといふことで、それならばそのことにまり子は満足してゐた。そしてこれは防空壕に持ち込んで掛けた柱時計の音とともに時間が流れて行き、防空壕の屋根と地面の隙間から日光が洩れて来てちやぶ台の一角に差してゐるのに気が付くだけの余裕があるといふことであり、それで始めてまり子は、

「隣の伝右衛門さんの所に泥棒が入ったんだつて、」と言つた。
 「余程困つた泥棒だつたのかね。」

「さうしたら家から上げた餃子をまだ食べてなかつたらしい。」
 「あれを取られたのか。」どこかに泥棒が入つたといふのが茶飲み話の種にしかならなかつたこの時代でも寅三はさう言はれて強い衝撃を受けないではゐなかつた。この時代に餃子は日本ではまだ目新しく珍品だつたのである。

「惜しいと言ふにも余りある。何故食べてしまはなかつたんだらう。あれは食べものがあると思ふと食べた氣になるんだよ。それが酒飲みの心理だ。」

「そのお酒を飲んでゐたのね。そのまま寝てしまつて氣が付かなかつたんだつて。」

「可哀さうにね。」これは実感だつた。幾らその頃の間人が結構食べてゐたと言つてもこれはいやになる程といふことではなくて、それが餃子だらうとどん粉だらうと食べものを手に入れることが寅三とまり子の両方にとつて第一の関心事でなければそれに非常に近いものだつた。

もし伝右衛門さんの所に食べものを持つて行つても取られてしまふならば自分の所に伝右衛門さんと呼ぶことで目の前で食べさせて確められるし、こつちも序でに食べられるといふ考へがまり子の頭に浮んだ。かういふ際に氣が合つた夫婦の間ではよくあることで同じことを寅三も思ひ付いたことはやがて、
 「さうだよ。」と言つたことで解つた。

併し勿論それで二人の朝の食事が終つたのではなかつた。そ

の献立てに卵を上げたいのであるが、そして毎日食べるだけの卵を手に入れるのがその頃でもさう難しいことではなかつたのであつても、まだ当時はそれを朝使つてしまふと後の二食が寂しくなるといふ位の制約はあつた。併し二人がパンを食べる他に紅茶を飲んでゐたことをこれまで書く暇がなかつた。何といふ名前だつたか、免に角それは外国の紅茶でその為電氣の炉とは別に普通の焔炉に焼け跡から拾つて来た燃え残りの木で火を起して薬缶が掛つてゐた。その外国の紅茶も闇で手に入れたものだつたが、さうではない正規の方法、当時の言葉で言へば政府による配給で廻されて来るものは殆ど何もなかつたのであるから以後は闇、闇と繰り返すのは止める。何故か朝飲む熱い飲みものには特別に我々に時間を忘れさせるものがある。前にまり子にとつて時間が流れてゐると書いた。そして時間を忘れる、或はそれが止つたと思ふのは時間が流れてゐるのを感じるのと同じことで、そのどつちでもなければ我々はあくせくしてゐて文字通りに時間がたつのを忘れ、さつきからもう十分もたつてゐることに氣付いて歯噛みするのである。当然まり子も寅三も煙草を出して吸ひ始めた。

これはアメリカのもので今日の時代になつてこそアメリカの煙草は紙に火を付けて吸つてゐるやうであつても、どうかすると一年に一度、或は三年に二度位その頃配給になつた「鵬翼」などといふ名前だけ懐しい日本のものに比べればまだしも本ものの煙草の味を思ひ出させてくれた。それにアメリカの煙草は大巻きでたつぷりある。まだ朝で外の温みが段々防空壕の中に

も忍び込んで来る。そして薬缶にも湯が残つてゐてまだ紅茶が飲める。まり子は少し前に起きたばかりなのに又眠くなつていつもより一層静かになり、寅三はこの辺で伝右衛門さんの所に盗難の見舞ひを兼ねて自分の所に呼ぶ日取りの都合を聞いて来ようと思つた。序でながら、もともとこれは説明を話の中に織り込んで話を長引かせるのが目的の、さう言へば小説であるからこれを書くのであるが、今日の国電といふ電車、或は円タクの中に出てゐる広告によく一種のホテルと思はれるものがある。つてそれには先づ欠かさず各室次の間、バス、トイレ、テレビ付きと書いてある。寅三がしてゐたやうな生活では次の間は意味をなさず、テレビが日本に入つて来たのはずっと後のことであつて、それ以外のことに就ては櫛田家の防空壕が当時の牛込区の焼け跡にあつたことを忘れてはならない。必ずしも草千里ではなくても防空壕に住むといふのはその頃でも誰にでも出来ることではなくて、満足に住める防空壕といふものが第一決して多くはなかつた。それで大体の想像は付く筈である。

従つて隣の伝右衛門さんと言つても今日のやうにこつちの玄関を出て隣の玄関のベルを押すといふ風には行かなかつた。勿論、電話を掛けるなどといふ野暮なことをここで考へてはならない。寅三はもう一度戻つて来て日取りに就てのまり子の都合を先に聞いて置かうと思つて防空壕を覗いて見るとまり子は柱にもたれ掛つてすやすや寝てゐた。まり子の都合などと氣を遣つた所で別にその日はアカデミー・フランセーズのレセプションだから困るといふ訳でもないだらうと寅三は考へ直し、その

まま伝右衛門さんの防空壕がある方角に向つて歩き出した。寅三の服装を言ふと、これはまだ背広の時代ではなくて戦争中に国民服といふ軍服とも平服とも付かない詰め襟式のものが考案されて軍人以外の男は半ば強制的にこれを着なければならぬことになつた。大概は所謂カーキ色で、これが戦争が終つても他に着るものがないままに男の普通の服装で寅三が着てゐるのもう大分擦り切れてゐた。ただ戦争中はその国民服のズボンの上からどういふ訳かゲートルを巻くことになつてゐて、これは空襲になつてズボンの裾に火が付くのを防ぐ為とかいふことだつたが、それならば腕にも繻帶しなければならぬ訳で寅三も今はさういふ兵隊並のゲートルなど巻いてゐなかつた。その他に確か国民帽といふ軍帽擬ひの庇が付いた帽子をこれは今も寅三は被つてゐて、これも別な帽子がない為だつたことは言ふまでもない。今ならば差し当り中共の廻しものと言つた恰好である。

伝右衛門さんの防空壕は寅三が住んでゐる高台から谷間に降りてその向うの高台で今はアメリカさんの屯所になつてゐる辺の一角にあつた。それをまり子が隣のと言つたのはそこに着くまでの間誰も住んでゐなかつたといふことで、寅三は高台を横切りながらどこか田舎道を歩いてゐる気分になつた。もう少しで雲雀が鳴いてゐないのを爰に思ふ所で、ただ田舎と違つてゐるのは見覚えがある建物がまだここかしこに焼け残つてゐることとでアメリカさんの屯所といふのも曾ての士官学校、それから防空司令部とかいふものが爆撃で潰されてからは士官学校が追